

第2節 石室と墳丘規模からみた中村1号墳

1 はじめに

中村1号墳は約30mの円墳で、埋葬施設は複室構造の横穴式石室である。ここでは、石室と墳丘規模からみて当古墳が出雲でどのような階層にあったのかを考察してみたい。階層差を抽出する方法として、墳丘の形態や規模の比較、石室全長の規模比較、石棺の規模比較、副葬品の比較などがある。これらの手法すべてを出雲の後期古墳で適用できるかというと、発掘調査事例が少なく、また、墳丘や石室が破壊されて、副葬品も盗掘されていることからそう簡単ではない。そこで、本稿では規模の大小が階層差を示していることを前提とし、石室の多くで玄室部分は残っているので、まず、玄室の面積を比較する。次に、墳丘規模の比較を行い、石室規模と墳丘規模の組合せから出雲における中村1号墳の階層的な位置付けをしたい。

2 研究史と問題の所在

(1) 出雲における石室墳の階層構造

出雲西部における石室墳の階層構造に関する研究は、神戸川流域（神門郡）を中心に行われている。西尾良一は神門川左岸と右岸の石室墳の対比から次のことを導き出した。「①墳丘・石室・石棺の規模とも右岸（今市・塩治）が大きく上回る。②両岸とも横口式家形石棺を内蔵し、古墳規模に比例し、刳抜石棺、組合石棺、石床と等級化されている。③右岸の石室・石棺は二室二棺あるいは一室二棺の合葬に対し、左岸（古志・朝山）では一室一棺の単葬のものが多い」とし（西尾良一 1986, 341頁），神戸川右岸の大型の石室墳が左岸より優位であると指摘した（西尾良一 1984, 1985, 1986）。西尾は、石室規模を比較する際に、玄室長を用いている。また、渡辺貞幸も神戸川右岸の古墳群が最高首長の類代墓を中心として形成され、左岸にはその最高首長に従属しつつそれを補佐した一族ないし家系の首長墓を中心に造営されたと指摘している（渡辺 1986）。

西尾克己と大国晴雄は石室長と石棺長辺長を比較し（西尾・大国 1991），その後、西尾克己は玄室長と幅によって石室規模を比較して階層構造を示した（西尾克己 1999）。

大谷晃二は墳丘・石室の規模と副葬品から古墳時代後期の神戸川下流域の地域には，
A階層：卓越した規模の墳丘や石室をもつ古墳（大念寺古墳、上塙治築山古墳、地蔵山古墳）…最高首長
B階層：墳丘・石室・副葬品において、次の階層Cの石室墳を越える内容をもち、階層Aの隣接地に
築かれている古墳（妙蓮寺山古墳、放レ山古墳、宝塚古墳、大樋古墳）…最高首長を輩出した一
族の有力者

C階層：律令制下の郷程度の間隔で点在する大念寺系石室墳（両袖の石室）…在地首長
D階層：群小墳の大念寺系石室や横穴墓…有力家族
の4つの階層構造が認められると指摘した。そして、飛鳥II期（出雲6b・c期）には横穴式石室を
もつ小型の方墳となり、階層構造がみられないことを指摘し、首長が官人化して、中央の規制に従わ

ねばならない立場となったと理解している（大谷 1999, 2011）。

一方、渡辺貞幸は出雲東部の馬橋川・意宇川流域の墳丘規模の比較から以下の通りの階層構造があると指摘した。馬橋川流域には墳丘規模が 40m 以上もある大首長の山代・大庭古墳群（山代二子塚古墳、鶏塚古墳、山代方墳、永久宅後古墳）があり、意宇川流域には大首長を盟主とする首長連合（地域政権）の構成員であった墳丘規模が 20 m 内外の有古墳群（岡田山 1・2 号墳、岩屋後古墳、御崎山古墳）があるとした（渡辺 1984）。角田徳幸は石棺式石室（本稿のⅢ類石室）の玄室の規模から、石室 2 a 期と 3 b 期に大規模、中規模、小規模の石室があることを示した。そして、階層構造の頂点に山代・大庭古墳群があると指摘した（角田 2008）。

出雲東部と西部の関係について渡辺貞幸は、古墳時代の中期段階にあった出雲地方の諸首長のゆるい連合関係・均衡関係が 6 世紀前半に破られ、首長の系列化が進んだ結果、山代・大庭古墳群を頂点とする東部出雲の政治的結集体と、今市塩冶古墳群被葬者を頂点とする西部出雲のそれとが、成立・並立したと指摘した。さらに、両者の政治的結集体をのちの郡名をとって「オウの勢力」・「オウ氏」、「カムドの勢力」・「カムド氏」と仮称した（渡辺 1986 a・b）。また、出雲東部の 6 世紀末～7 世紀初頭の山代方墳（筆者は 7 世紀前半と考えている、根拠は第 6 章第 1 節参照）が、整美な堀と外堤土塁を備えた大型方墳であることを理由に、その築造の背景に大和政権中枢と密接な関係を結んでいたと考えた（渡辺 1985）。そして、山代方墳の時期には「カムド氏」は大型古墳を造ることがなく、「オウ氏」は大和政権の後楯のもとで、ついに「カムド氏」を屈服させたと指摘した（渡辺 1987・1995）。

（2）問題の所在

これまでの研究により出雲の東部と西部それぞれに階層構造が認められることが指摘されている。問題は、階層構造の区分に用いられている石室と墳丘規模の分類基準が明確に示されていないことである。それ故に、中村 1 号墳の石室と墳丘規模が、出雲の中でどの階層に位置するかが判断できない。また、大谷晃二による階層分類を用いると、中村 1 号墳は「C 階層」となる。しかし、中村 1 号墳の副葬品をみると「B 階層」の妙蓮寺山古墳、放レ山古墳と大差がないように思う。大谷の階層分類は、石室と墳丘規模、副葬品、石室の立地などを基に総合的な階層構造を導き出そうとした視点は重要であるが、その基礎の部分である石室や墳丘規模の分類が不明確であり、また、副葬品も明らかでないものが多く、分類に無理が生じてきていると考えられる。また、飛鳥Ⅱ期に古墳が小型化する根拠を首長が官人化した結果と評価しているが、官人にかかる遺構（役所や寺院）が出雲に出現するのは飛鳥Ⅴ期以降であり時間差がある。古墳の小型化と首長の官人化については再検討する必要があろう。

以上の研究史上の問題点から、以下の方法で階層構造を導き出したい。本稿では前節で行なった石室編年を基に、Ⅰ類石室（両袖の石室）・Ⅱ類石室（片袖の石室）・Ⅲ類石室（石棺式石室）の玄室面積と墳丘の規模を示し、それらの分布のまとまりを分類し、時期ごとの階層構造を明確にしてみたい。そして、石室と墳丘との関係から出雲における中村 1 号墳の階層を位置付けたい。このような基礎作業を行うことが、階層構造を導き出す手段として、重要であると考えられる。

石室には石室編年を用いるべきであるが、墳丘には編年案を適用できないので、本稿では繁雑になることをさけ大谷晃二による出雲の須恵器編年（大谷 1994）を時間軸として示す。各古墳の時期の根

拠は、本書の第7章第1・4節の検討を基にしている。

3 玄室面積の比較

石室は空間であり、その大小を論ずるには玄室の容積を算出する必要があるが、天井石が破壊されていて容積が明確でないものもあるので、玄室の床面積を計測した。面積は既に発表されている石室図面（縮尺50分の1）を用い、面積を算出し、これを出雲の東部と西部に分けて示す（第1・6表）。

I類とIII類石室では石室の構造が異なるため、規模を単純には比較できない。そこで、それぞれの石室で規模を比較して時期ごとにグラフに示した（第1・2図）。また、II類石室はI類石室と構造的に近いことや、資料数が少ないのでI類石室と合わせて示した。

（1） I・II類石室の規模比較

I・II類石室を集成すると、玄室面積は $2.0 \sim 17.4\text{m}^2$ の範囲にあることがわかる。それらは、超大型、大型、中型、小型の4つに分類できる（第1図）。超大型は $16.0 \sim 17.4\text{m}^2$ 、大型は $6.8 \sim 11.3\text{m}^2$ 、中型は $4.1 \sim 6.0\text{m}^2$ 、小型は $2.0 \sim 3.5\text{m}^2$ となる（第2～5表）⁽¹⁾。この結果、出雲2期には大型と中型、出雲3期には超大型と大型と中・小型⁽²⁾、出雲4期前半には超大型と中型、出雲4期後半には大型と中型⁽³⁾、出雲5・6a期には大型と中型と小型、出雲6b・c期には小型が存在する。検討する資料数が少ないきらいはあるが、出雲3～5・6a期にかけて、玄室規模に2～3段階の階層構造がみてとれる。そして、出雲6b・c期には小型のみとなり、階層構造は認められない。

以上の検討をふまえると、中村1号墳の玄室面積 6.0m^2 は中型の規模となり、出雲4期前半では中型の中でも一番大きな規模である。出雲4期前半に築造されたI類石室には、超大型の上塙治築山古墳、中型の中村1号墳、放レ山古墳、刈山4・5号墳、山根垣古墳がある。

（2） III類石室の規模比較

ここでは、III類石室の玄室規模から階層構造を明らかにしたい。また、中村1号墳の位置する出雲西部にもIII類石室が分布する。それらが、どのような規模の石室なのかは、出雲西部の状況を考える上で重要である。

III類石室を集成した結果、玄室面積は $1.1 \sim 6.6\text{m}^2$ の範囲におさまる。それらの分布のまとめをみると大型、中型、小型、超小型の4つに分類できる（第2図）。大型は $5.6 \sim 6.6\text{m}^2$ 、中型は $3.4 \sim 4.6\text{m}^2$ 、小型は $2.4 \sim 3.0\text{m}^2$ 、超小型は $1.1 \sim 2.0\text{m}^2$ となる（第7～10表）。この結果、出雲3期には小型、出雲4期前半には大型と中型と小型、出雲4期後半には中型、出雲5・6a期には大型と中型と小型、出雲6b・c期には超小型が存在する。すなわち、出雲4～5・6a期にかけて玄室規模には3段階の階層構造がみてとれ、そして、出雲6b・c期には超小型のみとなり、階層構造はみられない。

中村1号墳と同時期の出雲4期前半には大型の岩屋後古墳、塩津神社古墳、朝酌岩屋古墳、中型の团原古墳、太田1号墳、林8号墳、小型の池の尻古墳、朝酌小学校校庭古墳がある。

出雲西部にある典型的なIII類石室の山崎古墳と奥屋敷古墳（どちらも楯縫郡）は中型、寺山1号墳（出雲郡）は小型に分類され、III類石室が変容したもの（III'）も中型か小型となり⁽⁴⁾、大型のIII類石室は出現していない。

第1表 出雲西部における主要な横穴式石室玄室の面積と墳丘

時期	番号	古墳名	石室型式	面積 (m ²)	玄室面積の分類	墳形	主丘規模 (m) 括弧内は全長	墳丘規模の分類	時期決定の根拠
出雲3期	①	今市大念寺古墳	I類	17.4	超大型	前方後円墳	45 (92)	大型	石室構造と副葬品
	②	妙蓮寺山古墳	I類	8.2	大型	前方後円墳	25 (49)	中型	石室構造と副葬品
	3	半分古墳	—	約3.5	小型	前方後円墳	20 (34以上)	小型	
出雲4期前半	④	上塩治築山古墳	I類	16.0	超大型	円墳	47	大型	石室構造と副葬品
	⑤	中村1号墳	I類	6.0	中型	円墳	30	中型	石室構造と副葬品
	⑥	放レ山古墳	I類	5.2	中型	円墳	13	小型	石室構造と副葬品
	7	刈山5号墳	I類	5.1	中型	円墳	15	小型	副葬品
	8	刈山4号墳	I類	5.1	中型	円墳	13	小型	石室構造
	9	山根垣古墳	I類	4.1	中型	円墳	17	小型	石室構造
出雲4期後半	10	宝塚古墳	I類	7.4	大型	—	—	—	石室構造と石棺
	11	小谷下古墳	I類	5.3	中型	円墳	15	小型	石室構造
	12	塚山古墳	II類	4.8	中型	—	—	—	石棺の配置
出雲5・6a期	13	上塩治地蔵山古墳	I類	6.8	大型	—	—	—	石室構造・石棺の配置
	⑭	美談神社2号墳	III類'	5.0	中型	方墳	13	小型	石室構造と副葬品
	15	大梶古墳	I類	4.3	中型	—	—	—	石室構造
	16	小坂古墳	I類	3.2	小型	?	15?	小型	石室構造
	⑯	出西小丸1号墳	I類	2.7	小型	円墳	10	小型	石室構造と副葬品
	18	佐皿谷奥古墳	I類	2.5	小型	方墳	10	小型	石室構造
	19	山崎古墳	III類3	3.6	中型	—	—	—	石室構造
	20	奥屋敷古墳	III類3	3.4	中型	—	—	—	石室構造
	21	道脇古墳	III類3'	2.6	小型	—	—	—	石室構造
	22	寺山1号墳	III類3	2.4	小型	方墳	14	小型	石室構造
	23	大前山古墳	I類	2.3	小型	?	10?	小型	石室構造
	⑰	上石堂平1号墳	I類	2.2	小型	円墳?	9	小型	石室構造と副葬品
	25	光明寺2号墳	I類	3.4	小型	—	—	—	石室構造
出雲6b・c期	26	高野1号墳	I類	3.0	小型	—	—	—	石室構造
	27	大寺2号墳	I類	2.5	小型	方墳	10	小型	石室構造
	28	石臼古墳	I類	2.4	小型	—	—	—	石室構造
	⑲	三田谷3号墳	I類	2.0	小型	方墳	6	小型	石室構造と副葬品

*丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第2表 I・II類石室玄における超大型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積 (m ²)
出雲3期	①	今市大念寺古墳	I類	17.4
出雲4期前半	④	上塩治築山古墳	I類	16.0
				16.0～17.4

第4表 I・II類石室における中型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積 (m ²)
出雲2期	③	林43号墳	I類	5.1
	⑧	岡田山1号墳	I類	4.7
	⑨	田和山1号墳	I類	4.1
出雲4期前半	⑤	中村1号墳	I類	6.0
	⑥	放レ山古墳	I類	5.2
	7	刈山5号墳	I類	5.1
	8	刈山4号墳	I類	5.1
	9	山根垣古墳	I類	4.1
	11	小谷下古墳	I類	5.3
出雲4期後半	12	塚山古墳	II類	4.8
	15	大梶古墳	I類	4.3
4.1～6.0				

第3表 I・II類石室玄における大型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積 (m ²)
出雲2期	⑬	薄井原古墳 2号石室	II類	9.8
	⑭	薄井原古墳 1号石室	II類	9.6
出雲3期	⑯	御崎山古墳	I類	11.3
	⑰	妙蓮寺山古墳	I類	8.2
出雲4期後半	10	宝塚古墳	I類	7.4
	13	上塩治地蔵山古墳	I類	6.8
6.8～11.3				

第5表 I・II類石室における小型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積 (m ²)
出雲3期	3	半分古墳	—	約3.5
出雲5・6a期	16	小坂古墳	I類	3.2
	⑯	出西小丸1号墳	I類	2.7
	18	佐皿谷奥古墳	I類	2.5
	23	大前山古墳	I類	2.3
	⑰	上石堂平1号墳	I類	2.2
	25	光明寺2号墳	I類	3.4
	26	高野1号墳	I類	3.0
	27	大寺2号墳	I類	2.5
	28	石臼古墳	I類	2.4
	⑲	三田谷3号墳	I類	2.0
2.0～3.5				

第6表 出雲東部における主要な横穴式石室玄室の面積と墳丘

時期	番号	古墳名	石室型式	面積(m ²)	玄室面積の分類	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長	墳丘規模の分類	時期決定の根拠
出雲2期	⑩	山代二子塚古墳	—	—	—	前方後方墳	57 (94)	大型	
	⑪	薄井原古墳2号石室	II類	9.8	大型	前方後方墳	30 (50)	中型	石室構造と副葬品
	⑫	薄井原古墳1号石室	II類	9.6	大型	前方後方墳	30 (50)	中型	石室構造と副葬品
	⑬	林43号墳	I類	5.1	中型	前方後円墳	12 (18)	小型	石室構造と副葬品
出雲3期	⑭	手間古墳	—	—	—	前方後円墳	32 (66)	中型	副葬品
	⑮	東淵寺古墳	—	—	—	前方後円墳	33 (62)	中型	
	⑯	椎山1号墳	—	—	—	前方後円墳	18 (33)	小型	
	⑰	御崎山古墳	I類	11.3	大型	前方後方墳	25 (40)	中型	石室構造と副葬品
	⑱	岡田山1号墳	I類	4.7	中型	前方後方墳	14 (24)	小型	石室構造と副葬品
	⑲	田和山1号墳	I類	4.1	中型	前方後円墳	12 (20)	小型	副葬品
	⑳	古天神古墳	III類1	3.0	小型	前方後方墳	18.5 (27)	小型	石室構造と副葬品
	㉑	伊賀見1号墳	III類1	2.9	小型	前方後方墳	12 (25)	小型	石室構造と副葬品
	㉒	岩屋後古墳	III類2a	6.6	大型	方墳か	—	—	石室構造と副葬品
出雲4期前半	㉓	塩津神社古墳	III類2a	6.3	大型	—	—	—	石室構造
	㉔	朝酌岩屋古墳	III類2a	5.8	大型	方墳	30	中型	石室構造
	㉕	团原古墳	III類2a	4.6	中型	方墳か	30?	中型	石室構造と副葬品
	㉖	太田1号墳	III類2a	4.0	中型	—	—	—	石室構造
	㉗	林8号墳	III類2a	3.8	中型	方墳	20	小型	石室構造
	㉘	池の尻古墳	III類2a	2.5	小型	—	—	—	石室構造
	㉙	朝酌小学校校庭古墳	III類2a	2.5	小型	—	—	—	石室構造
	㉚	向山1号墳	III類2b	4.0	中型	方墳	32	中型	石室構造と副葬品
	㉛	飯梨穴神古墳	III類2b	3.9	中型	方墳	18未満	小型	石室構造
出雲4期後半	㉜	太田2号墳	III類2b	3.7	中型	—	—	—	石室構造
	㉝	永久宅後古墳	III類3	5.6	大型	—	—	—	石室構造
	㉞	飯梨岩舟古墳	III類3	4.3	中型	—	—	—	石室構造
出雲5・6a期	㉟	西宗寺古墳	III類3	4.2	中型	—	—	—	石室構造と副葬品
	㉟	山代方墳	III類3	3.7	中型	方墳	45	大型	石室構造と副葬品
	㉟	雨乞山古墳	III類3	3.7	中型	方墳	—	—	石室構造
	㉟	葉佐間古墳	III類3	3.7	中型	—	—	—	石室構造
	㉟	太田5号墳	III類3	3.7	中型	—	—	—	石室構造
	㉟	栗坪1号墳	III類3	3.7	中型	方墳	14	小型	石室構造
	㉟	太田4号墳	III類3	3.6	中型	—	—	—	石室構造
	㉟	太田3号墳	III類3	2.9	小型	—	—	—	石室構造
	㉟	川原古墳	III類3	2.9	小型	—	—	—	石室構造
出雲6b・c期	㉟	若塚古墳	III類4	2.0	超小型	方墳	11	小型	石室構造
	㉟	鏡北廻古墳	III類4	1.8	超小型	方墳	10	小型	石室構造
	㉟	廻原1号墳	III類4	1.1	超小型	方墳	10	小型	石室構造

*丸印の数字の古墳は時期が確定しているもの

第7表 III類石室における大型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積(m ²)
出雲4期前半	㉟	岩屋後古墳	III類2a	6.6
	㉟	塩津神社古墳	III類2a	6.3
	㉟	朝酌岩屋古墳	III類2a	5.8
出雲5・6a期	㉟	永久宅後古墳	III類3	5.6

第8表 III類石室における中型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積(m ²)
出雲4期前半	㉟	團原古墳	III類2a	4.6
	㉟	太田1号墳	III類2a	4.0
	㉟	林8号墳	III類2a	3.8
出雲4期後半	㉟	向山1号墳	III類2b	4.0
	㉟	飯梨穴神古墳	III類2b	3.9
	㉟	太田2号墳	III類2b	3.7
	㉟	飯梨岩舟古墳	III類3	4.3
	㉟	西宗寺古墳	III類3	4.2
	㉟	山代方墳	III類3	3.7
	㉟	雨乞山古墳	III類3	3.7
	㉟	葉佐間古墳	III類3	3.7
	㉟	太田5号墳	III類3	3.7
	㉟	栗坪1号墳	III類3	3.7
	㉟	太田4号墳	III類3	3.6
	㉟	廻原1号墳	III類3	3.4

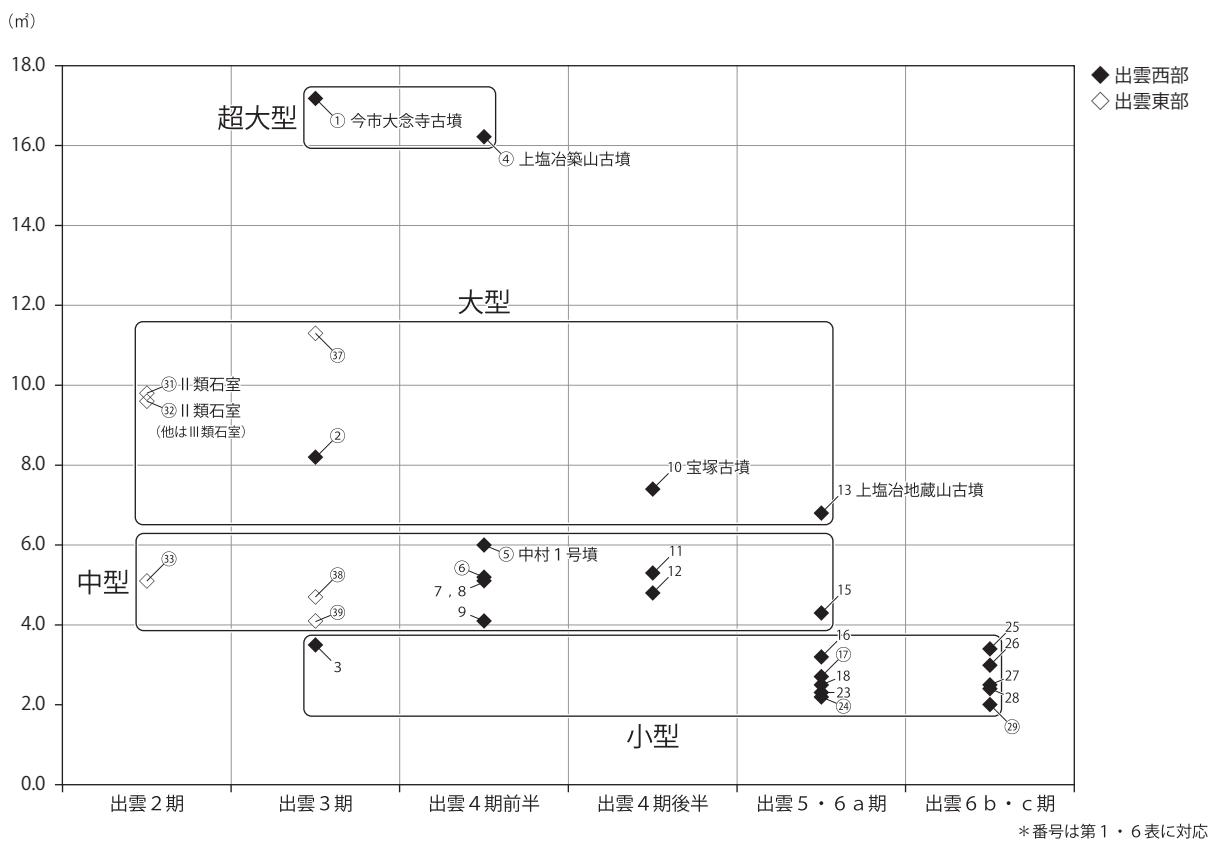
3.4 ~ 4.6

第9表 III類石室における小型の玄室

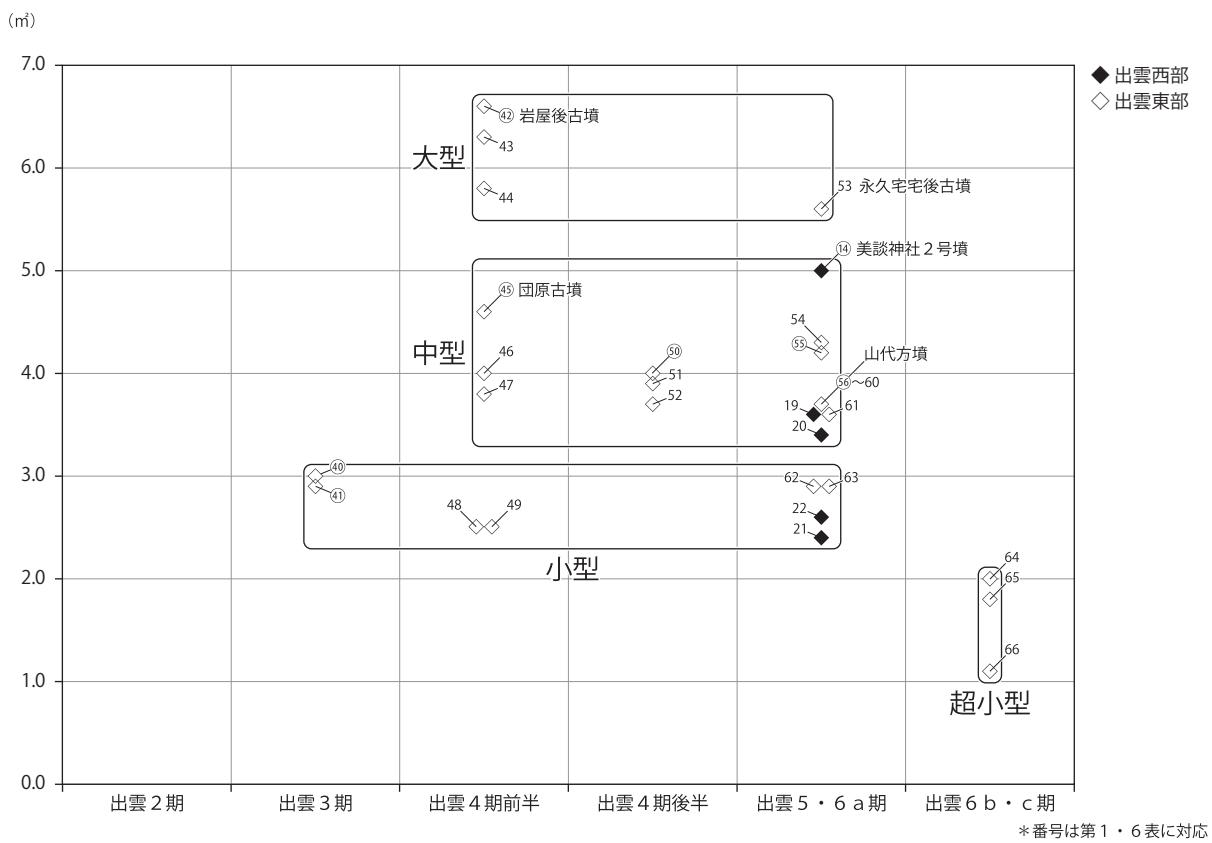
時期	番号	古墳名	石室型式	面積(m ²)
出雲3期	㉟	古天神古墳	III類1	3.0
	㉟	伊賀見1号墳	III類1	2.9
	㉟	池の尻古墳	III類2a	2.5
出雲4期前半	㉟	朝酌小学校校庭古墳	III類2a	2.5
	㉟	太田3号墳	III類3	2.9
	㉟	川原古墳	III類3	2.9
出雲5・6a期	㉟	道脇古墳	III類3'	2.6
	㉟	寺山古墳	III類3	2.4
	㉟	廻原1号墳	III類3	2.4

第10表 III類石室における超小型の玄室

時期	番号	古墳名	石室型式	面積(m ²)
出雲6b・c期	㉟	若塚古墳	III類4	2.0
	㉟	鏡北廻古墳	III類4	1.8
	㉟	廻原1号墳	III類4	1.1



第1図 I・II類石室玄室面積

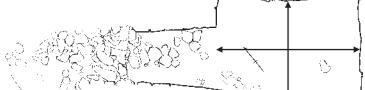
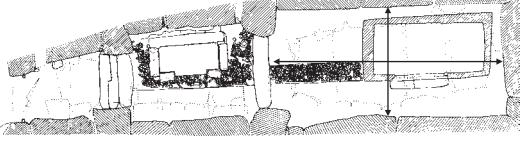
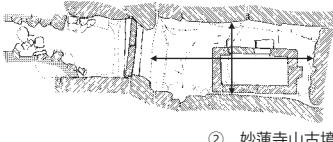
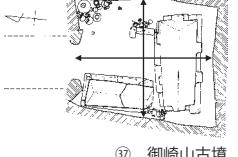
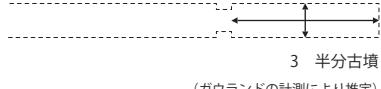
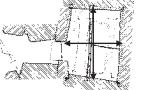
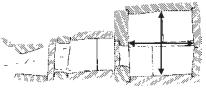


第2図 III類石室玄室面積

(3) 東西出雲の玄室規模の比較

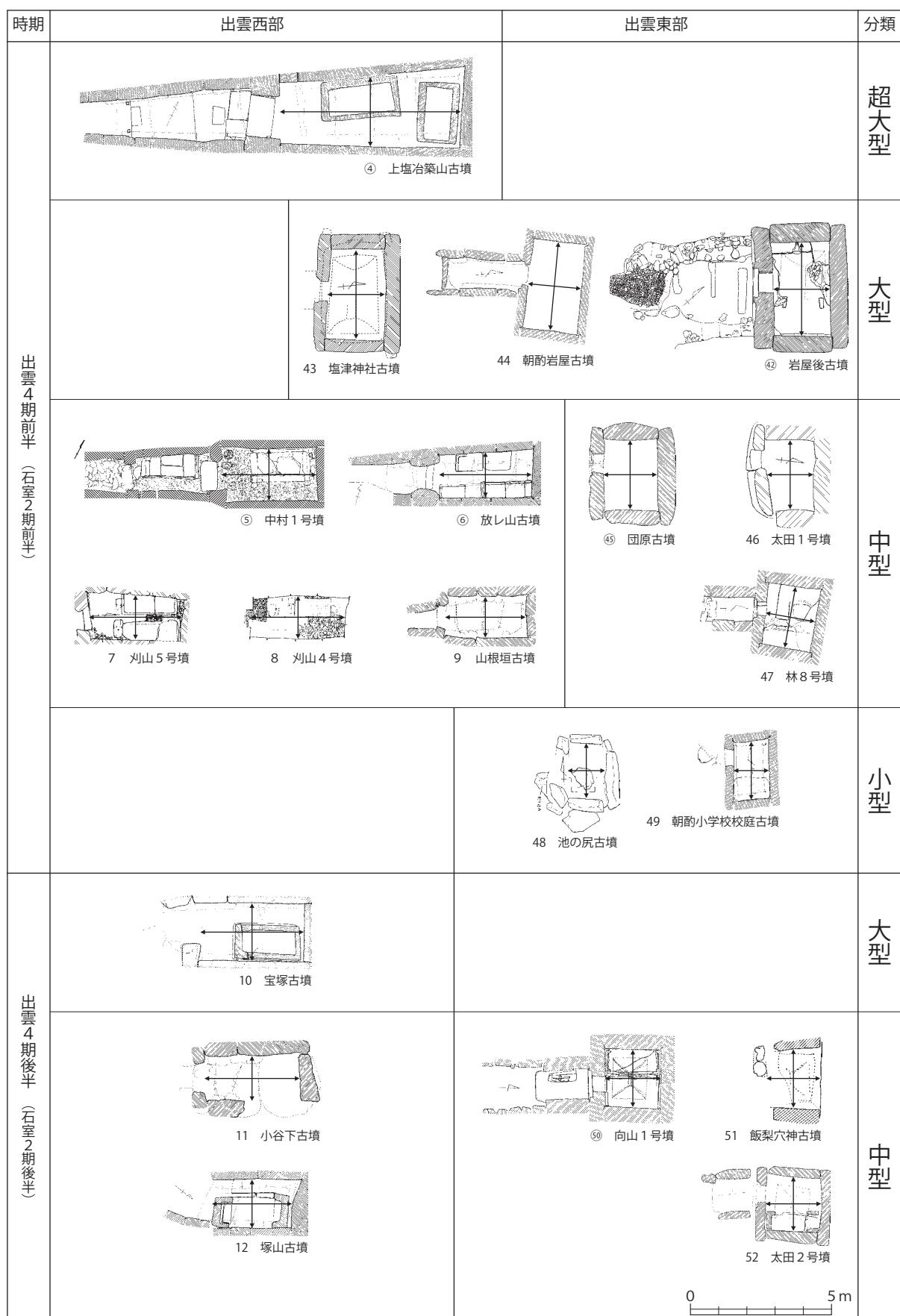
I・II・III類石室の規模分類をもとに、出雲の東部と西部の状況をまとめたのが第3～5図である。先にも触れたように、I・II類石室とIII類石室は構造が異なり、また、玄室面積の数値だけでは単純に比較はできない。そこで、ここでは、分類結果から導き出した階層構造を東西出雲で比較してみたい。

出雲2期には、I・II類石室の中で、大型と中型の2段階の階層がある。III類石室はまだ出現していない。また、出雲西部でも出雲2期の横穴式石室は出現していない。出雲3期になると東西出雲両地域に3段階の階層構造が認められる。しかし、その構造の比較は難しい。I類石室の超大型の今市大念寺古墳に対応する石室が出雲東部にはみられないことによる。東西出雲とも同じ3段階の階層構

時期	出雲西部	出雲東部	分類
出雲2期		 ⑪ 薄井原古墳第2号石室	大型
		 ⑫ 薄井原古墳第1号石室	
出雲3期		 ⑬ 林43号墳	中型
	 ① 今市大念寺古墳		超大型
出雲3期	 ② 妙蓮寺山古墳	 ⑭ 御崎山古墳	大型
		 ⑯ 岡田山1号墳	中型
	 3 半分古墳 (ガウランドの計測により推定)	 ⑮ 古天神古墳	小型
		 ⑯ 伊賀見1号墳	

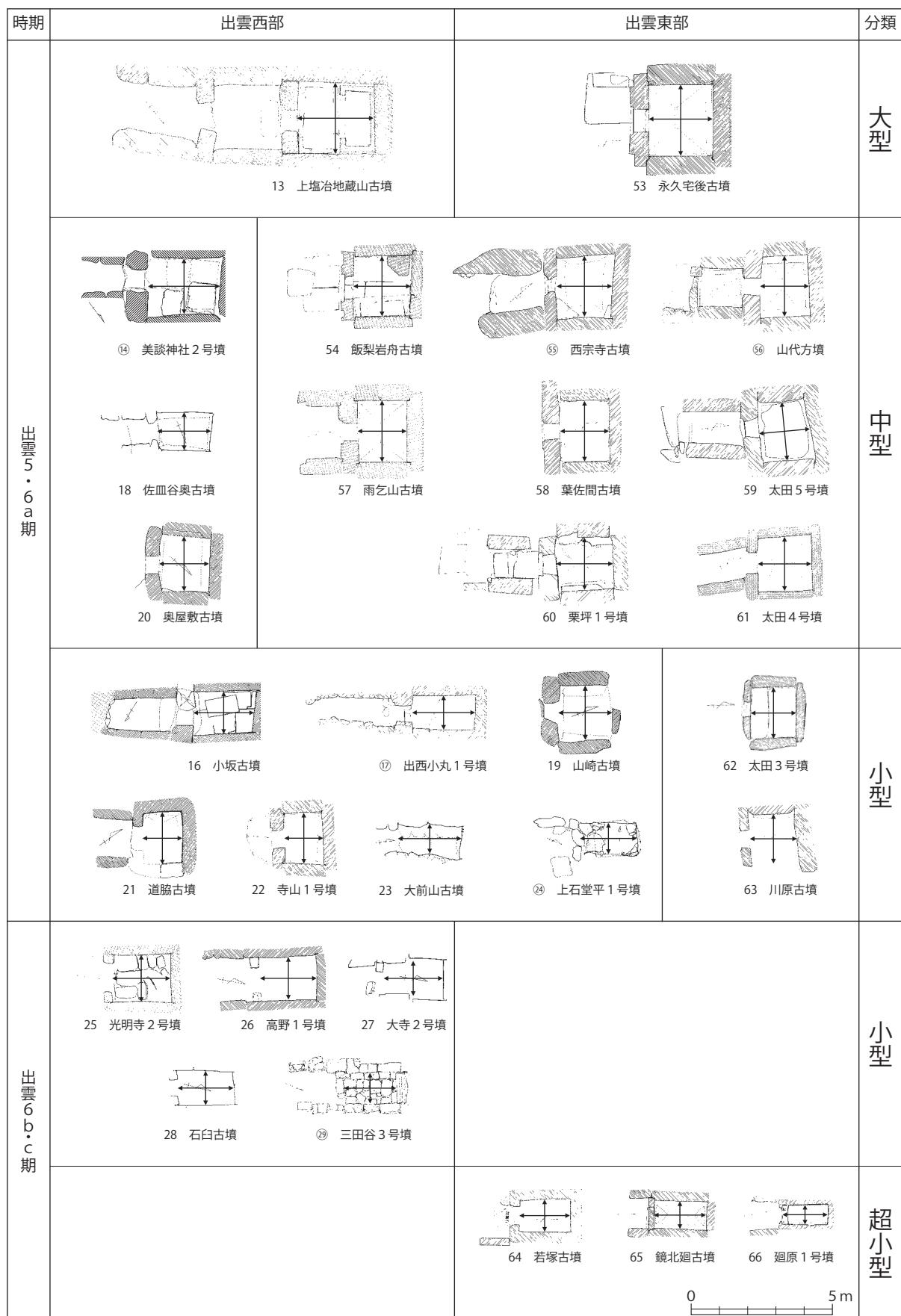
*番号は第1・6表に対応、丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第3図 出雲2・3期における横穴式石室玄室の面積比較（1：200）



*番号は第1・6表に対応、丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第4図 出雲4期における横穴式石室玄室の面積比較（1：200）



*番号は第1・6表に対応、丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの

第5図 出雲5・6期における横穴式石室玄室の面積比較（1：200）

造であるが、両者の対応関係については別の要素からの判断も必要であろう。

出雲4期前半の階層構造は出雲3期と比べて相互の石室規模が近似するので考えやすい。I類石室超大型の上塙治築山古墳（西部）とⅢ類石室大型の岩屋後古墳（東部）などが、また、I類石室中型の中村1号墳（西部）などとⅢ類石室の団原古墳（東部）が対応すると考えられる。出雲西部には小型の石室がみつかっていない。

出雲4期後半については、資料が少なく検討が難しいが、I類石室中型の小谷下古墳（西部）などとⅢ類石室中型の向山1号墳（東部）とが対応する。

出雲5・6a期には出雲の東部と西部に3段階の階層構造が認められる。I類石室大型の上塙治地蔵山古墳（西部）とⅢ類石室大型の永久宅後古墳（東部）が、I類石室中型の佐皿谷奥古墳（西部）とⅢ類石室中型の飯梨岩船古墳（東部）などが、I類石室小型の小坂古墳（西部）などとⅢ類石室小型の太田3号墳（東部）などが対応すると考えられる。以上のことから、出雲3～5・6a期まで出雲の東部と西部に大まかな3段階の階層構造があったと考えられる。

また、出雲6b・c期には、I類石室小型の三田谷3号墳（西部）などと、Ⅲ類石室の若塚古墳（東部）などの超小型が対応すると考えられる。すなわち、出雲全体で石室の小型化が進んでいることと、階層構造がみられないことがわかる。

以上の検討の結果、玄室面積に表現された出雲の石室階層の中で、中村1号墳の玄室は、中型の規模であることがわかる。

この玄室規模の分類の結果、研究史と大きく異なる問題が生じてきた。それは、出雲東部の最高首長と考えられている山代方墳は、Ⅲ類石室中型となり、最高首長の石室とは考えにくいということである。この問題については、墳丘規模を検討した後で解決したい。

4 墳丘規模の比較

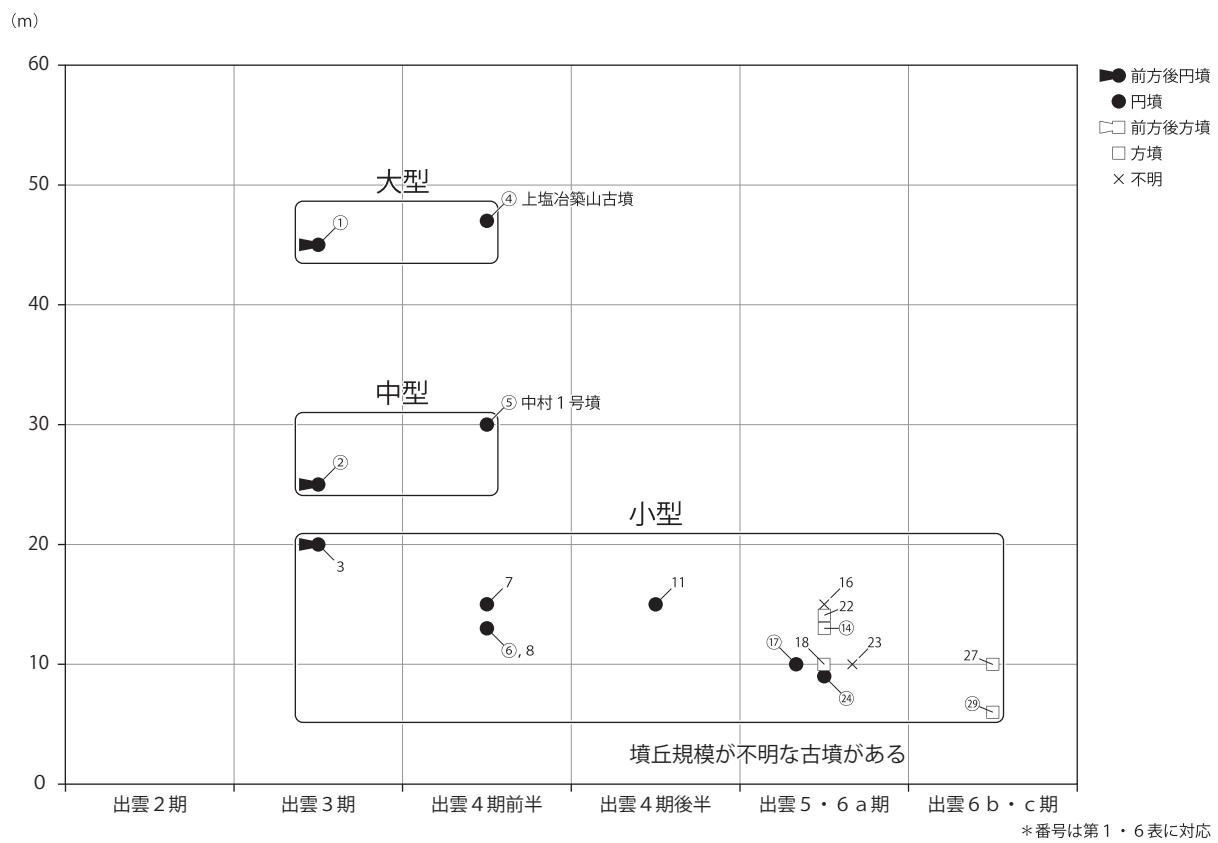
(1) 出雲における主丘規模比較

まず、墳丘規模の分類を行う。発掘調査で墳丘規模が明確になっている古墳は少ないが、測量調査により規模が推定されている（第1・6表）。また、前方後円墳や円墳など墳形によつ単純な規模比較が難しいと考えられることから、前方後円墳や前方後方墳は主丘部（後円部や後方部）の規模を採用し、他の円墳や方墳と比較する。計測数値は円墳が直径、方墳は長辺を採用している。また、埋葬施設が横穴式石室と推定されるものを対象にした。そして、墳形についても検討した。

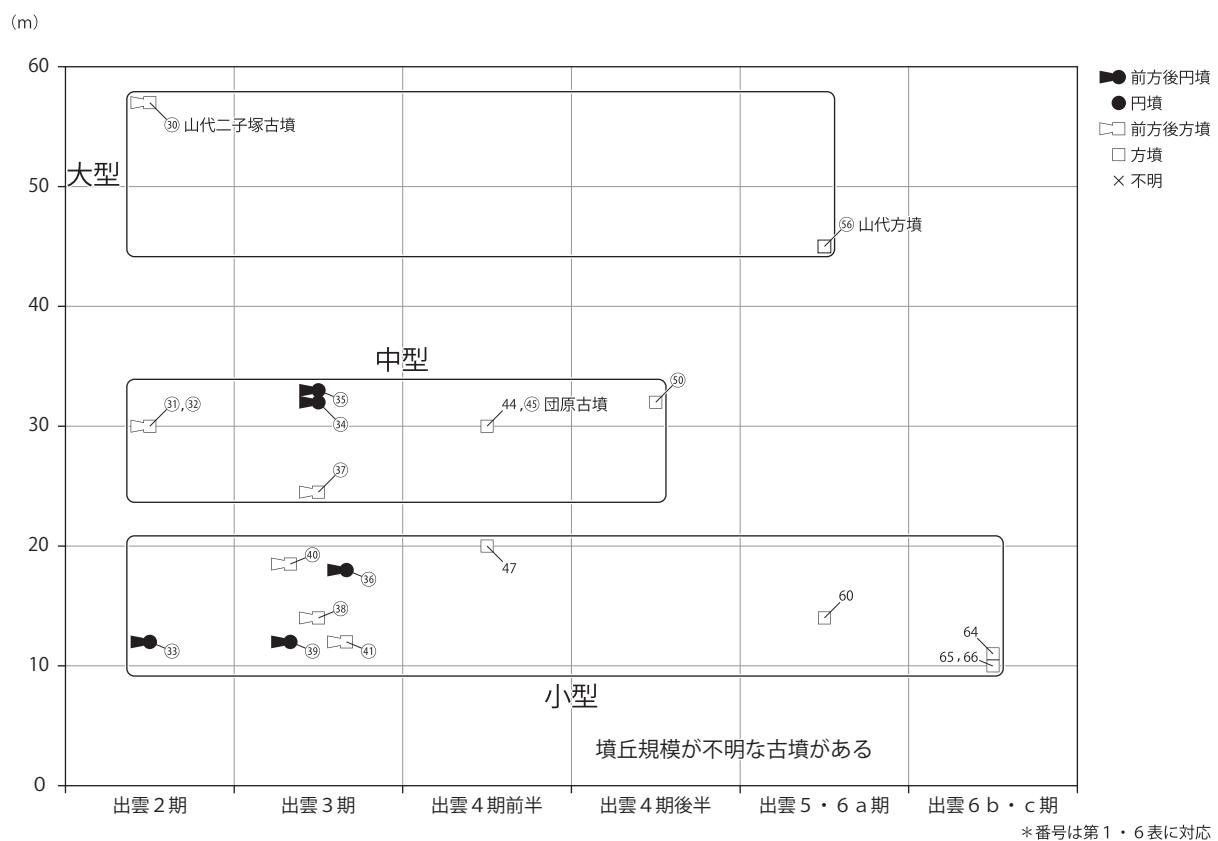
出雲西部では主丘規模が6～47mの範囲にある（第1表）。また、出雲東部では主丘規模が10～57mの範囲にある（第6表）。それらは、出雲の東部と西部で差がなく、大型、中型、小型の3つに分類できる（第6・7図）。大型は45～47m、中型は25～33m、小型は6～20mとなる（第11～16表）。

(2) 出雲西部の主丘規模と墳形

出雲西部では出雲2期に横穴式石室墳はない。出雲3期には、大型の今市大念寺古墳、中型の妙蓮寺山古墳、小型の半分古墳があり、3段階の階層構造がある。これらの墳形は前方後円墳である。



第6図 出雲西部における主丘規模比較



第7図 出雲東部における主丘規模比較

第 11 表 出雲西部における大型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長
出雲3期	①	今市大念寺古墳	前方後円墳	45(92)
出雲4期 前半	④	上塩治築山古墳	円墳	47 45 ~ 47

第 13 表 出雲西部における中型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長
出雲3期	②	妙蓮寺山古墳	前方後円墳	25(49)
出雲4期 前半	⑤	中村1号墳	円墳	30 25 ~ 30

第 15 表 出雲西部における小型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長
出雲3期	3	半分古墳	前方後円墳	20 (34以上)
出雲4期 前半	⑥	放レ山古墳	円墳	13
	7	刈山5号墳	円墳	15
	8	刈山4号墳	円墳	13
	9	山根垣古墳	円墳	17
出雲4期 後半	11	小谷下古墳	円墳	15
出雲5・ 6a期	⑭	美談神社2号墳	方墳	13
	16	小坂古墳	?	15?
	⑯	出西小丸1号墳	円墳	10
	18	佐皿谷奥古墳	方墳	10
	22	寺山1号墳	方墳	14
	23	大前山古墳	?	10?
	㉔	上石堂平1号墳	円墳?	9
出雲6b・ c期	27	大寺2号墳	方墳	10
	㉙	三田谷3号墳	方墳	6

6 ~ 20

第 12 表 出雲東部における大型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長
出雲2期	㉩	山代二子塚古墳	前方後方墳	57(94)
出雲5期	㉯	山代方墳	方墳	45 45 ~ 57

第 14 表 出雲東部における中型古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長
出雲2期	㉑	薄井原古墳 2号石室	前方後方墳	30(50)
	㉒	薄井原古墳 1号石室	前方後方墳	30(50)
出雲3期	㉓	手間古墳	前方後円墳	32(66)
	㉔	東淵寺古墳	前方後円墳	33(62)
	㉕	御崎山古墳	前方後方墳	25(40)
出雲4期 前半	㉖	朝酌岩屋古墳	方墳	30
	㉗	团原古墳	方墳か	30?
出雲4期 後半	㉘	向山1号墳	方墳	32

25 ~ 33

第 16 表 出雲東部における小型の古墳

時期	番号	古墳名	墳形	主丘規模(m) 括弧内は全長
出雲2期	㉙	林43号墳	前方後円墳	12(18)
	㉚	椎山1号墳	前方後円墳	18(33)
	㉛	岡田山1号墳	前方後方墳	14(24)
	㉜	田和山1号墳	前方後円墳	12(20)
出雲3期	㉝	古天神古墳	前方後方墳	18.5(27)
	㉞	伊賀見1号墳	前方後円墳	12(25)
出雲4期 前半	㉟	林8号墳	方墳	20
	㉟	飯梨穴神古墳	方墳?	18未満
出雲4期 後半	㉟	栗坪1号墳	方墳	14
	㉟	若塚古墳	方墳	11
	㉟	鏡北廻古墳	方墳	10
出雲5b・ c期	㉟	廻原1号墳	方墳	10

10 ~ 20

出雲4期前半の出雲西部では大型の上塩治築山古墳、中型の中村1号墳、小型の放レ山古墳の3段階の階層構造がある。これらの墳形は円墳である。

出雲4期後半には小型の小型の小谷下古墳のみしかわかっていない⁽⁵⁾。

出雲5・6a期には小型のみしかわかっていない⁽⁶⁾。墳形は、円墳に加えて方墳が採用されている。この時期にⅢ類石室の採用に伴い、墳形も方墳を採用していると考えられよう。

出雲6b・c期には出雲の東部と西部で小型のみで階層構造はみられない。墳形は、円墳はなく方墳のみである。

以上のことから、出雲西部の墳丘規模と墳形についてまとめると、出雲3期と4期前半に3段階の階層構造がある。そして、墳形は前方後円墳あるいは円墳で、前方後円墳の採用は出雲3期までであることがわかる。出雲4期後半と出雲5・6a期には、中型以上の古墳があると推定すると2段階程度の階層構造が認められる。出雲5・6a期には新たに方墳が採用され、出雲6b・c期には小型の方墳のみとなり、階層構造は認められない。

(2) 出雲東部の主丘規模と墳形

出雲2期には、大型の山代二子塚古墳と中型の薄井原古墳と小型の林43号墳があり、3段階の階層構造が認められる。墳形は前方後方墳と前方後円墳がある。

出雲3期には、中型の御崎山古墳と小型の岡田山1号墳などの2段階の階層構造がある。墳形は前方後方墳と前方後円墳がある。

出雲4期前半には、中型の朝酌岩屋古墳と小型の林8号墳などの2段階の階層構造がある。墳形は方墳である。

出雲4期後半では、中型の向山1号墳のみしかわかつてない。墳形は方墳である。

出雲5・6a期には、大型の山代方墳、小型の栗坪1号墳の2段階の階層構造がある。墳形は方墳である。

出雲6b・c期には、小型の方墳のみで階層構造はみられない。

以上のことから、出雲東部の墳丘規模と墳形についてまとめると、出雲2～5・6a期までに3段階あるいは2段階の階層構造が認められ、6b・c期には小型のみで階層構造は認められないようだ。墳形は、出雲2～3期にかけて、前方後方墳か前方後円墳が採用され、出雲4～6b・c期には方墳が採用されている。したがって、前方後方墳及び前方後円墳の採用は出雲3期までである。

(3) 出雲の東部と西部の主丘規模と墳形

以上の検討の結果、出雲の東部と西部の墳丘規模からみた階層構造は、出雲2～5・6a期にかけて2～3段階あり、出雲6b・c期にはないことがわかる⁽⁷⁾。

墳形については、出雲西部は出雲3～4期には円形を基調としているが、出雲東部では出雲2～3期に円形と方形を基調とする。前方後円墳及び前方後方墳の採用は出雲3期まで、出雲4期の出雲東部では方墳が、西部では円墳が採用されている。出雲西部の方墳の採用は、東部より遅れⅢ類石室の導入と同時期の出雲5・6a期からであろう。

したがって、墳丘規模に表現された出雲の墳丘階層の中で、中村1号墳の墳丘は、中型の規模であることがわかる。

先に玄室規模の比較で問題とした山代方墳は、墳丘規模が大型となり、最高首長にふさわしい規模である。そうすると、玄室規模と墳丘規模が合致していないと考えられ、玄室規模のみや墳丘規模のみで、階層構造を検討することが難しいことに気づく。

5 玄室と墳丘の関係

(1) 玄室と墳丘規模の組合せからみた階層構造

これまで、玄室と墳丘規模をそれぞれを検討してきたが、ここでは、それらの組合せについて検討し、階層構造を明らかにしてみたい。具体的には、玄室規模分類の超大型・大型・中型・小型・超小型と、墳丘規模分類の大型・中型・小型を組合わせの状況から、階層構造について検討してみたい。

玄室と墳丘規模の組合せの状況を東西出雲にわけて示した(第17・18表)。そして、その組合せは現状では8種類ある。それらを大まかにA～C類に分類した(第19表)。

A 1類：(玄) 超大型・(墳) 大型, (玄) 大型・(墳) 大型のもの。

A 2類：(玄) 大型・(墳) 中型, (玄) 中型・(墳) 大型のもの。

B 1類：(玄) 中型・(墳) 中型のもの。

B 2類：(玄) 中型・(墳) 小型のもの。

C類：(玄) 小型・(墳) 小型, (玄) 超小型・(墳) 小型のもの。

この分類を須恵器型式(時期)ごとにみると、古墳築造に関して、出雲地域において出雲3～5・6a期の間はA～C類の3段階の階層構造が認められるが、出雲6b・c期にはC類のみで、階層構造が認められない(第20表)。

この分類で、出雲4期前半の中村1号墳はB類となり、出雲では上位から見て2番目の階層にあると推定できる。また、その中でもB1類で、B類の中でも階層が高いと考えられる。

出雲5期の山代方墳の時期には、出雲西部に上塙冶地蔵山古墳が築造されている。前者は中型の玄室、後者は大型の玄室である。後者の墳丘規模は現地の状況から推定すると前者のように大型にはならないが、中型の墳丘規模を持つ可能性は十分にある。そうすると、階層分類では両者ともA2類になる可能性がある。したがって、渡辺が指摘している「カムド氏」が「オウ氏」によって屈服した確たる証拠はみあたらない。そして、その後の出雲6b・c期に出雲西部には小型化したI類石室が築造されることもそれを首肯させる証拠となろう。

(2) 玄室と墳丘の築造

玄室と墳丘規模の組合せをみると、基本的には玄室≥墳丘[例えば(玄) 大型・(墳) 大型や、(玄) 大型・(墳) 中型]となる。超小型はⅢ類石室の出雲6b・c期のみにあり、基本的には小型の中で考えることができよう。このような状況の中で、山代方墳のみが玄室<墳丘[(玄) 中型・(墳) 大型]となり、特異な状況を示している。また、多くの玄室が墳丘の中心に築かれるのに対し、山代方墳や栗坪1号墳は、墳丘の中心からはずれた位置に玄室が築造されている。

このように、出雲における石室と墳丘の築造において、山代方墳が特異であることがわかる。既に研究史で触れたように、山代方墳の特異性については、渡辺貞幸が整美な堀と外堤土壘を備えた大型方墳であることを理由に、その築造の背景に大和政権中枢と密接な関係を結んでいたと指摘している。そこで、石室と墳丘の位置関係について、全国的な視野で検討している青木敬の論考を参考とし、出雲における古墳築造について検討してみたい。青木は古墳築造で最も優先される事項を3つに分類している。

墳丘優先型：前期古墳以来の墳丘規模を優先するもの(埋葬施設が墳丘の中心にないもの)

石室優先型：後期古墳からはじまる横穴式石室を優先するもの(横穴式石室の玄室が墳丘の中心にない)

折衷型：墳丘・横穴式石室の双方を優先するもの(墳丘上段に横穴式石室が構築され、かつ墳丘の中央に玄室がつくられるもの)

そして、7世紀になると、関東地方以外に折衷型および石室優先型だけを採用するようになり、中央部埋葬の意識が列島の広い地域に浸透し、関東及び東北地方には、墳丘優先型が顕著に現れてくると指摘している(青木2007)。

第17表 出雲東部における玄室と墳丘規模の関係

時期	番号	古墳名	玄室面積の分類	墳丘規模の分類	玄室と墳丘規模の組合せ	玄室と墳丘分類
出雲2期	⑩	山代二子塚古墳	一	大型	・大	A
	⑪	薄井原古墳 2号石室	大型	中型	大・中	A2
	⑫	薄井原古墳 1号石室	大型	中型	大・中	A2
	⑬	林43号墳	中型	小型	中・小	C
出雲3期	⑭	手間古墳	一	中型	・中	
	⑮	東淵寺古墳	一	中型	・中	
	⑯	椎山1号墳	一	小型	・小	
	⑰	御崎山古墳	大型	中型	大・中	A2
	⑱	岡田山1号墳	中型	小型	中・小	B2
	⑲	田和山1号墳	中型	小型	中・小	B2
	⑳	古天神古墳	小型	小型	小・小	C
出雲4期 前半	㉑	伊賀見1号墳	小型	小型	小・小	C
	㉒	岩屋後古墳	大型	一	大・	A
	㉓	塩津神社古墳	大型	一	大・	A
	㉔	朝酌岩屋古墳	大型	中型	大・中	A2
	㉕	団原古墳	中型	中型	中・中	B1
	㉖	太田1号墳	中型	一	中・	
	㉗	林8号墳	中型	小型	中・小	B2
	㉘	池の尻古墳	小型	一	小・	C
	㉙	朝酌小学校校庭 古墳	小型	一	小・	C
出雲4期 後半	㉚	向山1号墳	中型	中型	中・中	B1
	㉛	飯梨穴神古墳	中型	小型	中・小	B2
	㉜	太田2号墳	中型	一	中・	
出雲5・ 6a期	㉝	永久宅後古墳	大型	一	大・	A
	㉞	飯梨岩舟古墳	中型	一	中・	
	㉟	西宗寺古墳	中型	一	中・	
	㉟	山代方墳	中型	大型	中・大	A2
	㉟	雨乞山古墳	中型	一	中・	
	㉟	葉佐間古墳	中型	一	中・	
	㉟	太田5号墳	中型	一	中・	
	㉟	栗坪1号墳	中型	小型	中・小	B2
	㉟	太田4号墳	中型	一	中・	
出雲6b・ c期	㉟	太田3号墳	小型	一	小・	C
	㉟	川原古墳	小型	一	小・	C
	㉟	若塚古墳	超小型	小型	超小・小	C
出雲6b・ c期	㉟	鏡北廻古墳	超小型	小型	超小・小	C
	㉟	廻原1号墳	超小型	小型	超小・小	C

第18表 出雲西部における玄室と墳丘規模の関係

時期	番号	古墳名	玄室面積の分類	墳丘規模の分類	玄室と墳丘規模の組合せ	玄室と墳丘分類
出雲3期	①	今市大念寺古墳	超大型	大型	超大・大	A1
	②	妙蓮寺山古墳	大型	中型	大・中	A2
	③	半分古墳	小型	小型	小・小	C
出雲4期 前半	④	上塙治築山古墳	超大型	大型	超大・大	A1
	⑤	中村1号墳	中型	中型	中・中	B1
	⑥	放レ山古墳	中型	小型	中・小	B2
出雲4期 後半	⑦	刈山5号墳	中型	小型	中・小	B2
	⑧	刈山4号墳	中型	小型	中・小	B2
	⑨	山根垣古墳	中型	小型	中・小	B2
出雲5・ 6a期	⑩	宝塚古墳	大型	一	大・	A
	⑪	小谷下古墳	中型	小型	中・小	B2
	⑫	塚山古墳	中型	一	中・	B?
出雲6b・ c期	⑬	上塙治地藏山古墳	大型	中型?	大・中?	A2
	⑭	美談神社2号墳	中型	小型	中・小	B2
	⑮	大梶古墳	中型	一	中・	
出雲5・ 6a期	⑯	小坂古墳	小型	小型	小・小	C
	⑰	出西小丸1号墳	小型	小型	小・小	C
	⑱	佐皿谷奥古墳	小型	小型	小・小	C
出雲5・ 6a期	⑲	山崎古墳	中型	一	中・	B?
	⑳	奥屋敷古墳	中型	一	中・	B?
	㉑	道脇古墳	小型	一	小・	C
出雲5・ 6a期	㉒	寺山1号墳	小型	小型	小・小	C
	㉓	大前山古墳	小型	小型	小・小	C
	㉔	上石堂平1号墳	小型	小型	小・小	C
出雲6b・ c期	㉕	光明寺2号墳	小型	一	小・	C
	㉖	高野1号墳	小型	一	小・	C
	㉗	大寺2号墳	小型	小型	小・小	C
出雲6b・ c期	㉘	石臼古墳	小型	一	小・	C
	㉙	三田谷3号墳	小型	小型	小・小	C

第19表 玄室と墳丘規模の組合せと分類

玄室と墳丘規模の分類の組合せ	分類
超大・大	A1
大・大	
大・中	A2
中・大	
中・中	B1
中・小	B2
小・小	
超小・小	C

第20表 東西出雲における玄室と墳丘規模の組合せ関係

時期と地域 と分類	出雲2期		出雲3期		出雲4期前半		出雲4期後半		出雲5・6a期		出雲6b・c期	
	東部	西部	東部	西部	東部	西部	東部	西部	東部	西部	東部	西部
A1類	○			●	○	●	○		○	●		
A2類	●		●	●					●	○	○	
B1類					●	●	●					
B2類			●		●	●	●		●	●	●	
C類	●		●	●	●	●			●	●	●	●

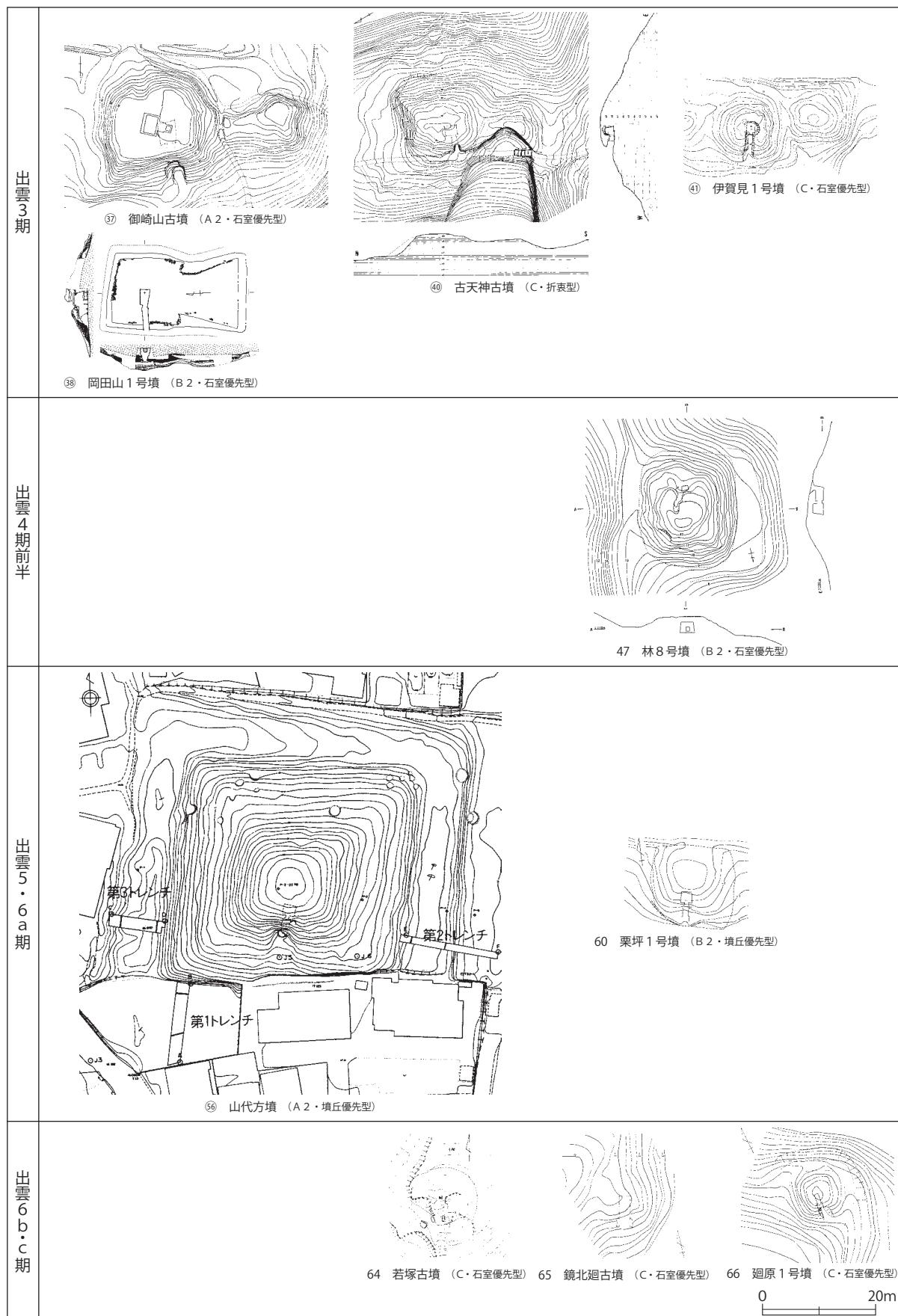
●確実なもの, ○不確実なもの

それでは、青木の分類を基に出雲の状況をみてみたい（第8～10図）。I類石室の中村1号墳は、石室を基盤層から築造し、玄室が墳丘の中心にある。したがって、石室優先型である。出雲におけるI類・II類石室の多くは石室優先型と推定される。次にIII類石室をみてみよう。古天神古墳は、石室が墳丘中心及び上部に築造されていて、折衷型である。林8号墳は、石室を基盤層から築造し、玄室が墳丘の中心にあり、石室優先型である。III類石室をもつ山代方墳と栗坪古墳は、墳丘の中心に石室が築造されていないので、墳丘優先型となる。つまり、出雲ではI・II類石室をもつ古墳が基本的に石室優先型であるのに対し、III類石室の古墳には墳丘優先型、折衷型、石室優先型の各類型が存在することがわかる。墳丘の中心に玄室を置くことが主流の中で、玄室が墳丘の中心に築造されない山代方墳と栗坪古墳は特異な状況を示している。



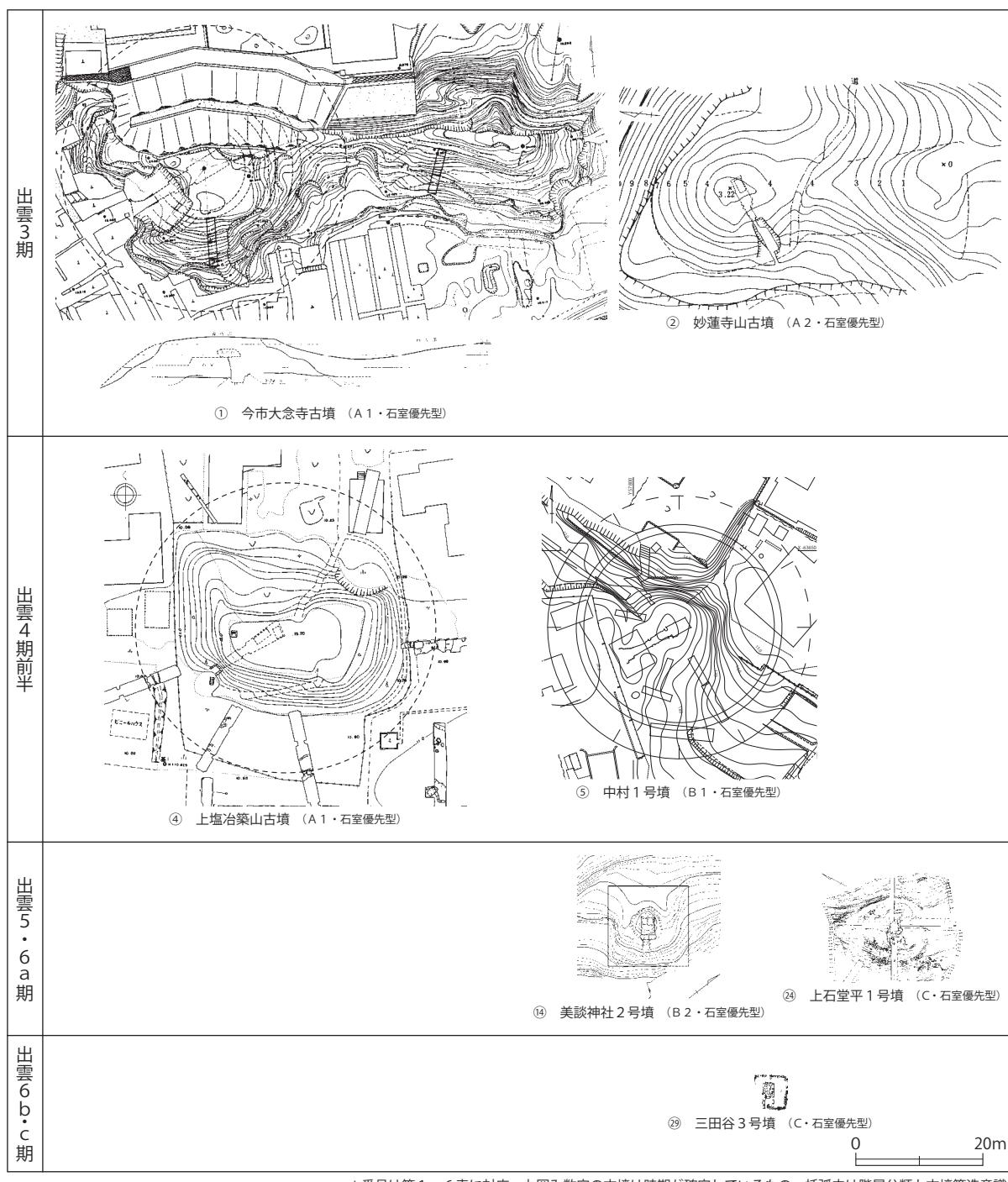
*番号は第1・6表に対応、丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの、括弧内は階層分類と古墳築造意識

第8図 出雲東部における出雲2期の石室と墳丘の位置 (1:1,000)



*番号は第1・6表に対応、丸囲み数字の古墳は時期が確定しているもの、括弧内は階層分類と墳丘築造意識

第9図 出雲東部における出雲3～6期の石室と墳丘 (1:1,000)



第10図 出雲西部における出雲3～6期の石室と墳丘の位置 (1 : 1,000)

山代方墳が築造された7世紀前半（出雲5・6a期）と同時期の近畿地方では、中央部埋葬を意識した石室優先型および折衷型のみが採用されている。したがって、山代方墳の築造意識と近畿地域の古墳築造意識は異なるようである。つまり、山代方墳の築造の背景に大和政権中枢との密接な関係が存在した、と渡辺は指摘するが、墳丘と石室との関係からは、そうは言えないのであろう。この山代方墳の墳丘優先型の出自については、他のⅢ類石室の石室と墳丘の関係を明らかにする必要があり、現状では判断ができないが、同時期の栗坪古墳が墳丘優先型であることは興味深い。

6.まとめ

本稿ではⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類石室の玄室面積および墳丘規模それぞれについて、客観的な基準を示して分類を行った。その結果、玄室規模と墳丘規模を組み合わせることが階層構造を考える上で重要であることを指摘した。具体的には、玄室と墳丘の規模分類を組合せ、A～C類の階層分類を示した。出雲2～5・6a期にかけてA～C類が存在し、2～3段階の階層構造が認められる。しかし、出雲6b・c期にはC類のみとなり、階層構造は認められなくなる。本稿の目的である、中村1号墳の出雲における階層はB1類となり、上から2番目の階層であり、かつその中でも上位に位置したと考えられる。

本稿では、玄室と墳丘規模から古墳の階層構造を明らかにしたが、中村1号墳が複室構造の横穴式石室であることや副葬品が豊富であることも重要な視点である。また、大きな課題として残ることは、A～C類に分類した古墳に埋葬される人物の実態解明であり、中村1号墳の被葬者の実態解明である。これらについては、本稿で行った基礎作業と組み合わせて、今後、検討してみたい。（坂本豊治）

註

- (1) 規模の分類には、小時期ごとに細分する方法もある。この方法は時期ごとに面積の分類基準ができ、詳細な検討が可能である。ただ、相対的な判断ができなくなる問題も含む。本稿では、分類基準が煩雑になることを避けた。
- (2) 出雲3期の中型(38・39)と小型(3)は近い数値であり、時期ごとに細分すれば同じ分類となる。
- (3) 神戸川左岸にある出雲4期後半の宝塚古墳の玄室面積は大型となる。この時期に、宝塚古墳よりも規模が大きい玄室はみつかっていない。神門川右岸の勢力が左岸の勢力よりも、常に優位に立っていたといえるのであろうか。
- (4) 美談神社2号墳(⑭)はⅢ類石室が変容したもの(Ⅲ')である。この玄室面積は、典型的なⅢ類石室の中型のなかで最も大きく、大型に含めることもできる。ただ、石室平面が縦長方形となるのはⅠ類石室の影響と考えられ、そのために規模が大きいようである。Ⅰ類石室の玄室規模にあてはめても中型の範疇に入ることから、Ⅲ類石室の分類でも中型と考えた。
- (5) 出雲西部の宝塚古墳の墳丘規模は不明であるが、現地の残丘から推定すると30m以上の規模で、中型か大型となろう。
- (6) 出雲西部の上塙治地蔵山古墳の墳丘規模は不明であるが、現地から推定して30m未満の規模であると考えられる。玄室の奥壁か中央を墳丘の中心とした場合、最低でも20mの墳丘は必要である。したがって、中型規模の墳丘をもつと推定できよう。
- (7) 階層構造の変化の過程について次の2案が想定できる。案1は階層構造が3段階⇒2段階⇒1段階へと徐々に変化する、案2は3段階から1段階へ急激に変化する過程である。案1の場合、出雲西部では3段階から2段階の階層構造への変化が東部よりも遅れた可能性もある。しかし、検討資料が少ないので、現状ではこの判断はむずかしく、今後の課題したい。

参考文献

- 青木 敬 2007 「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』第23号 41～65頁
- 出雲考古学研究会編 1987 『石棺式石室の研究』
- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 39～82頁
- 大谷晃二 1999 「上塩治築山古墳をめぐる諸問題」『上塩治築山古墳の研究』島根県古代文化財センター調査研究報告書4 島根県古代文化センター 179～193頁
- 大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会 43～54頁
- 大谷晃二 2001 「出雲東部の大首長の性格と権力」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 103～121頁
- 角田徳幸 2008 「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館 72～107頁
- 白石太一郎 2009 「古墳の墳丘における横穴式石室の位置について」『書陵部紀要』第61号 [陵墓篇] 宮内庁書陵部 1～20頁
- 西尾克己・大国晴雄 1991 『出雲平野の古墳』出雲市民文庫9 出雲市教育委員会
- 西尾克己 1999 「出雲西部における上塩治築山古墳の石室と石棺の位置付け」『上塩治築山古墳の研究』島根県教育委員会・島根県古代文化センター 119～127頁
- 西尾良一 1984 「今市・大念寺古墳について」『ふい～るど・の～と』6号
- 西尾良一 1985 「今市・大念寺古墳について」『ふい～るど・の～と』8号
- 西尾良一 1986 「大社造と横穴式石室」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 333～372頁
- 渡辺貞幸 1983 「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題—測量調査の成果と今後の課題—」『山陰文化研究紀要』第23号 島根大学 213～240頁
- 東森市良・永見 英・野坂俊之・金山尚志・大谷晃二・原 裕司 1996 「安来市・飯梨穴神古墳—新たに発見された石棺式石室について—」
- 渡辺貞幸 1984 「岡田山1号墳の現状と問題点」『島根考古学会誌』第1集 島根考古学会 85～91頁
- 渡辺貞幸 1985 「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第1号 島根大学山陰地域研究総合センター 1～16頁
- 渡辺貞幸 1986 a 「大念寺古墳の歴史的位置」『島根考古学会誌』第3集 島根考古学会 27～32頁
- 渡辺貞幸 1986 b 「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 221～238頁
- 渡辺貞幸 1987 「古墳時代の出雲 考古学からみた政治史」『季刊明日香風』第22号財団法人飛鳥保存財団 30～35頁
- 渡辺貞幸 1995 「弥生・古墳時代の出雲—『風土記』と考古学の接点—」『風土記の考古学』③『出雲風土記』の巻 同成社 67～86頁